東京学芸大学教育実践研究紀要　第19集　pp. 15-20，2023

通常の学級で学ぶ中学生の障害に関する意識調査

古　相　佑　人*・大　伴　　潔**

（2022年11月22日受理）

FURUSO, Y. and OTOMO, K.; A Survey on the Awareness of Disabilities in Middle School Students in Regular Classes.
ISSN 1349-9580

This study investigated the current state of awareness and attitudes toward disability among regular public middle school students. 328 students studying in regular classes answered a questionnaire. Results showed that about half of the students had opportunities to interact with people with disabilities or knew people with disabilities personally, whereas about half of the students had no such experience. School settings were shown to provide opportunities for such interactions, and TV news and dramas appeared to contribute to the recognition of disabilities. There were many positive impressions of disabilities, such as “individuality” and “kindness,” and 70% of the students indicated that they would like to be involved in the opportunity to interact people with disabilities. In addition, 70% of the students wanted to understand and know more about people with disabilities. Future issues include changes in the understanding of disabilities from elementary to middle schools, and verification of whether disability understanding education yeilds lasting effects on students.

KEY WORDS : Awareness of Disabilities, Regular Classes, Middle School Students

* *Miyashiro School for Special Needs*
** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*

Ⅰ．はじめに

現在日本は障害の有無にかかわらず誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指している。その実現に向けて，特別支援学校や特別支援学級に在籍する児童生徒が通常の学級に在籍する障害のない児童生徒とともに活動する「交流及び共同学習」の機会が，学校の授業や体験活動を通して定期的に設けられている。小中学校での，特別支援教育や交流及び共同学習は，「障害」や「障害のある人」を知り，理解するのに重要である。通常の学級に在籍する中学生が「障害」に対してどのようなイメージや考えを持つかについて検討した先行研究に小野・児玉・日野[6]がある。特別支援学級との交流を行った生徒について「積極的受容」「消極的受容」「消極的コミュニケーション」「積極的コミュニケーション」の４つの観点から調査を行っている。その結果，「特別支援学級の友達ともっと一緒にいたいと思う」や「特別支援学級の友達と仲良くしていけると思う」といった「積極的受容」の意識は４月から12月にかけて上昇することが示された。それに対して，「特別支援学級の友達は自分たちとは違う生徒だと思う」や「特別支援学級の友達は自分と比べてできないことが多いと思う」などと

* 埼玉県立宮代特別支援学校
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター

いった「消極的受容」の意識には有意な差は認められなかったが，ほとんどの学級において得点が減少傾向にあり，交流及び共同学習を通して「消極的受容」の意識がわずかではあるが軽減されたことが報告されている。しかし，「消極的受容」の意識はわずかの軽減しか見られなかったことから，障害のある生徒に対して消極的な意識を持つ生徒が少なからずいることが窺える。ただし，4つの観点から意識の変化を調査しているため，「障害」や「障害のある人」に対しての具体的なイメージや考えは不明である。

通常の小・中学校における障害理解教育に関する実施状況を検討した今枝・楠・金森[2]は，小学校において対象とする障害種は発達障害（20%），知的障害（18%），視覚障害（17%），中学校では知的障害（22%），視覚障害（17%），発達障害（15%）であり，知的障害や発達障害が視覚障害と同程度の実施状況であると報告している。その背景として，学校現場において知的障害や発達障害の認識が広まってきていると述べている。小中学校の両方において，外見では区別しにくい障害を含めて，障害理解教育が実施されてきたことが分かる。

障害理解教育の内容について今枝・楠・金森[3]は，肢体不自由や視覚障害を対象とした教育において「障害シミュレーション体験」が他の障害種と比較して有意に多く実施されていることを示した。しかし，小学校における知的障害に関する教育は「在籍児童生徒の説明」が多く，小・中学校における知的障害，発達障害の理解に向けた活動において「障害シミュレーション体験」は少ないことが明らかになった。このことから，目に見える肢体不自由や視覚障害は体験的な学びとして児童生徒が学びやすいのに対し，見えにくい知的障害や発達障害は体験的な学びではなく「在籍する児童生徒の説明」で終わることが多いことが窺える。視覚的に気付きにくく体験も難しいことから，知的障害や発達障害は児童生徒の印象に残りにくい可能性がある。

今枝・金森[4]によると，公立小中学校と比較して，私立小中学校では「知的障害」「発達障害」についての障害理解教育の実施が少ない。私立小中学校では，障害のある児童（疑いを含む）の在籍数が少ないことが要因として挙げられており，公立中学校においても特別支援学級の有無や交流及び共同学習の実施の有無によって，障害のある人との関わりの有無や程度に違いが生じてくることが考えられる。

公立小学校における障害に関する授業の実施状況と課題について，樋口・林田・河原・新海[1]は「授業を実施に移す上での困難・課題」「前提知識における困難・課題」「人的環境や時間に関する困難・課題」を挙げている。「前提知識」については，教科書を用いた読書教材が実施されており，改善策として学校全体で授業を計画・実施し，教員間の情報交換が重要であると述べている。現在，テレビやインターネット，ニュース，映画やドラマなど様々なメディアで障害について見聞きする。授業を計画・実施するにあたり，教科書に限定されず過去のメディア等も教材として利用できると思われる。

通常学級における，障害理解教育に関する授業実践として岡野[5]の報告がある。小学校6年生を対象とした発達障害に関する授業において，児童は熱心に参加し，外見では分からない障害があることへの驚きや，当事者の大変さへの洞察などの率直な意見が寄せられたと述べている。発達障害を扱った授業での参加態度から，小学生における障害理解への意欲が示唆される。一方，樋口・林田・河原・新海[1]の結果が示すように，障害に関する授業を十分に行えていないという課題もある。

このような背景も踏まえ，本研究は中学校の通常学級に在籍する生徒を対象に，「障害者（児）」にどのような意識，イメージを持っているのか，また「障害」についての知識はあるのかについて質問紙調査を行い，その結果から，今後の通常学級における障害理解教育の課題について検討することを目的とした。

Ⅱ．方法

1．調査対象

千葉県A市の中学校1校の1年生101名，2年生104名，3年生123名を対象として質問紙調査を行った。学校の管理職に文書で依頼し，学校の同意を得て実施した。生徒には回答は任意であることを伝え，回収数は328名分（回収率87%）であった。

2．調査内容

選択式・記述式を複合した6項目でアンケートを構成した。内容は以下の通りである。

(1) 障害のある人に関わったことがあるかどうか：障害のある人と関わったことがあるかについて，「a.関わったことがある」「b.障害のある人に関わったことはないが障害のある人を個人的に知っている」「c.関わったこともなく知っている人もいない」の3つの選択肢から選んでもらった。aとbに関しては下記のように，どのような関係か回答を求めた。

・どのような関係か：（選択肢）家族や親族；同じ学級；同じ学校；地域の人；その他

・どういう場面で関わったか（自由記述回答）

(2) メディアを通して障害のある人のことを見たり，読

んだり，聞いたりしたことはあるか：どのようなメディアで「障害」に関する情報を見聞きしたことがあるかをテレビドラマや映画，本，ニュースのそれぞれについて回答してもらった。「ある」と回答した生徒には，本や映画のタイトルとその内容も回答してもらった。

(3) ボランティアや遊び，勉強などの活動を通して，障害のある方と関わりたいと思うか：「積極的に関わる機会を見つけたい」「機会があれば関わってみたい」「特に関わりたいとは思わない」から選択してもらった。

(4) 障害のある人を理解したい。「障害」について勉強してみたいと思うか：(3) と同様に，障害について今後勉強してみたいかどうかについて回答を求めた。

(5) 障害のある人についてどう思うか：下記の9個の項目について，「思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」のいずれかで回答してもらった。

・自分たちと違う
・優しい
・明るい
・気軽に接することができる
・顔や体に特徴がある
・言葉の使い方や話し方に特徴がある
・何を考えているのか分からない
・大変そう
・個性がある

(6)「障害のある人」と言われたとき，どのような「障害」をイメージするか：自由記述で生徒の障害に関するイメージを回答してもらった。

Ⅲ．結　果

(1) 障害がある人と関わった経験

1) 経験の有無

表1は3学年の結果と平均を示す。全学年を平均すると「a.関わったことがある」を選択した回答が39%，「b.関わったことはないが障害のある人を個人的に知っている」を選択した回答が11%，「c.直接関わったこともなく知っている人もいない」を選択した回答は，50%という結果であった。

表1　障害がある人と関わった経験の有無

	a.	b.	c.
1年生	44%	8%	48%
2年生	41%	9%	50%
3年生	33%	15%	52%
平均	39%	11%	50%

2) 障害のある人との関係

「a関わったことがある」と回答した生徒における当該の人との関係（「関わったことがある」回答者におけるパーセンテージ）と「b関わったことはないが障害のある人を個人的に知っている」いう回答した生徒におけるパーセンテージを表2と表3にそれぞれ示す。「家族や親族」「同じ学級」「同じ学校」「地域の人」が10%～25%程度の割合であった。

表2　「a関わったことがある」と回答した場合の内訳

	家族や親族	同じ学級	同じ学校	地域の人
1年生	15%	10%	22%	13%
2年生	14%	14%	16%	19%
3年生	14%	12%	16%	16%
平均	14%	12%	18%	16%

表3　「b関わったことはないが障害のある人を個人的に知っている」と回答した場合の内訳

	家族や親族	同じ学級	同じ学校	地域の人
1年生	6%	0%	38%	25%
2年生	11%	11%	11%	11%
3年生	0%	12%	12%	38%
平均	9%	12%	20%	25%

また，「その他」の内訳では，「パラリンピックの選手」のパーセンテージ（各学年の人数を母数とする）が高かった（表4）。

表4　「その他」の内訳

	パラリンピック選手	自分の友人	家族の知り合い
1年生	20%	7%	3%
2年生	11%	7%	3%
3年生	11%	3%	1%
平均	14%	6%	2%

3) 関わりの場面

どのような場面で関わったのかに関する結果を表5に示す（各学年の人数を母数とする）。「学校行事・授業」「学校生活」の割合が比較的高いことから，学校が主な

関わりの場になっていることが示された。

表5　関わりの場面

	学校行事授業	学校生活	家族や友人との交流	日常生活	福祉施設にて
1年生	13%	15%	11%	0%	5%
2年生	14%	9%	0%	7%	6%
3年生	11%	9%	0%	9%	4%
平均	13%	11%	11%	8%	5%

(2) メディアからの情報

1）メディアを通して情報を得たか

表6はメディアで見聞きしたことがあるかについての結果を示す。1年生の52%，2年生の57%，3年生の71%がメディアから情報を得た経験があると回答した。

表6　メディアで見聞きしたことがあるか

	ある	ない
1年生	52%	48%
2年生	57%	43%
3年生	71%	29%
平均	60%	40%

2）メディアの種類

各学年とも，「ニュース」を選択した回答が最も多く，このほかに「テレビドラマ」「映画」「本」の順に選択した回答が多かった。また，「ニュース」の中でも「パラリンピック」のニュースという回答が最も多かった（表7）。

表7　どのようなメディアか

	テレビドラマ	映画	本	ニュース
1年生	7%	4%	3%	39%
2年生	3%	7%	5%	42%
3年生	20%	7%	7%	39%
平均	10%	6%	5%	40%

(3) 障害のある人と関わる機会の希望

表8は障害のある人と関わる機会の希望に関する結果を示す。3学年の平均では，「積極的にかかわる機会を見つけたい」は4%，「機会があれば関わってみたい」は70%，「特に関わりたいと思わない」は26%の回答であった。

表8　障害のある方と関わりたいと思うか

	積極的に関わる機会を見つけたい	機会があれば関わってみたい	特に関わりたいとは思わない
1年生	3%	71%	26%
2年生	5%	72%	23%
3年生	3%	68%	29%
平均	4%	70%	26%

(4) 障害についての理解の意欲

表9は障害理解の意欲に関する結果を示す。「理解してみたい，勉強してみたい」という回答は3学年の平均で76%であった。

表9　「障害のある人」を理解したい，「障害」について勉強してみたいか

	ある	ない
1年生	73%	27%
2年生	76%	24%
3年生	78%	22%
平均	76%	24%

(5) 障害のある人についての印象

「思う」を4点，「やや思う」を3点，「やや思わない」を2点「全く思わない」を1点とした場合の高得点順に配列した結果を図1に示す。「個性がある」「優しい」「明るい」等，障害のある人を肯定的に捉えた印象が上位であった。その反面，「気軽に接することができる」は下位であった。

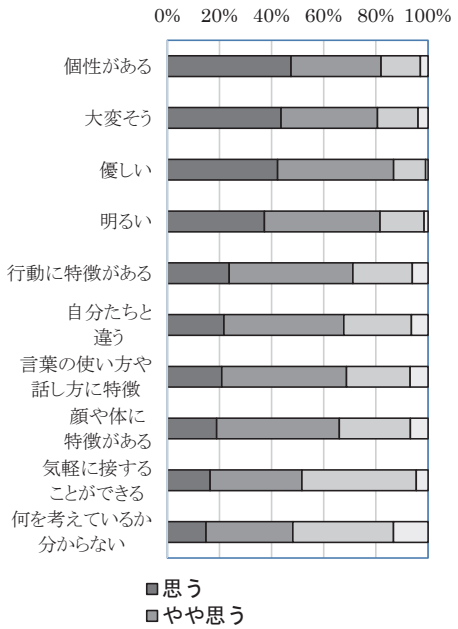

図1　障害のある人についてどう思うか

(6)「障害」についてのイメージ

図２は「障害」のイメージに関する自由記述回答を類似するもの同士でまとめた場合の件数を示す。「身体に関する」回答が最も多い結果であった。次いで「視覚に関すること」「聴覚に関すること」が多いことが分かった。「その他」には「ダウン症」「大変そう」「やさしい」（以上各２件）「自閉症」「精神的なもの」「かわいそう」「怖い」「ぼーっとしている」「大変だけど努力している」（各1件）が挙がった。

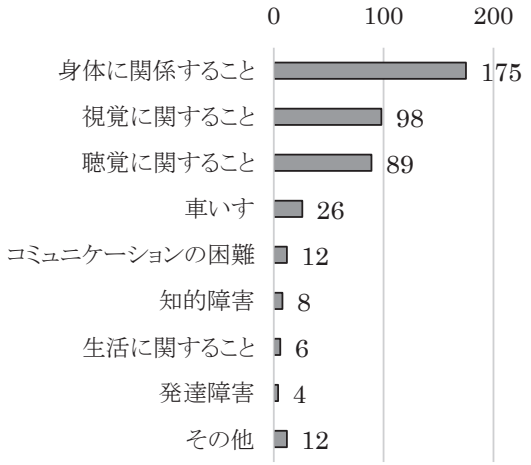

図２　想起する障害のイメージ（件数）

Ⅳ．考　察

調査を通して，約半数の中学生が障害のある人との関わりを経験していたり，障害のある人を個人的に知っていたりすることが示され，障害のある人との接点は家族や親族，学校や学級，地域と多様であることが明らかになった。調査を行った年は日本におけるパラリンピックの開催とも重なったことから，中学生にとって障害について知る機会になったことも示された。パラリンピックの選手を招いて交流を行う学校もあったことから，障害について知る機運が高まった年であった。学校行事・授業や学校生活が関わりの場面として比較的高い割合で挙げられたが，「交流及び共同学習」がどの程度実施されていたのかは本研究では把握していない。交流及び共同学習が実施されている学校では，「在籍する生徒への説明」や直接交流により，「関わったことがある」という回答は多くなり，同年代の障害のある人との関わりの場になると予想される。交流及び共同学習などの機会がない場合，同年代の障害のある人と関わる機会は得られにくい状況であると言えよう。

学年が上がるにつれて，障害のある人のことをメディアで見聞きしたことがある割合が高くなっており，「ニュース」を選択した回答が最も多く，他のメディアと比較しても，特に１，２年生では大きな差がみられた。パラリンピックやパラリンピック選手についてのニュースが放送されていたことが背景にあると考えられる。このことは，メディアに取り上げられるような社会的なイベントが開催されるかどうかによって，興味関心の差が生じる可能性を示唆している。３年生ではテレビドラマの影響も示されたが，近年でが自閉症スペクトラムの小児外科医について描かれたテレビドラマ「グッドドクター」（2018）や，東大合格を目指す発達障害のある生徒も登場する「ドラゴン桜」（2021）視覚障害のある女性が主人公のひとりである「ヤンキー君と白杖ガール」（2021）など，障害を持つ人が登場したり，題材とされたりするテレビドラマも放映された。米国では幼児向けのSesami Streetに発達障害があるという設定のキャラクターも登場するなど，テレビや映画も障害理解につながる重要なメディアであると言える。

「ボランティアや遊び，勉強などの活動を通して，障害のある人とかかわりたいと思うか」「障害のある人を理解したい，障害について勉強してみたいか」という質問項目では，３割弱の生徒が否定的な回答をしており，「障害」に対する意識や興味関心が薄いということが示唆される。本調査で多くの回答を得た「学校行事，授業」での「パラリンピックの選手」との関わり，特別支援学級や特別支援学校との交流など，生徒の興味関心やニーズを捉えた機会を準備することによって，生徒たちの「障害」や「障害のある人」に対しての意識や興味関心は変化すると考えられる。一方，7割の生徒は関わったり勉強したりしたいと考えている。そのため，特別支援学級や特別支援学校等と連携をして積極的に障害理解教育を実施していくことも，共生社会を作るための重要な方策であろう。

障害のある人についての印象として，「大変そう」というマイナスイメージは各学年において，高頻度であったことから，マイナスイメージを抱いている生徒が少なからずいることが示された。また「気軽に接することができる」という選択の割合が低かったことから，障害のある人と気軽に接することが難しいと考えられていることも窺える。これらの印象を少しでも軽減するために，障害に関する知識を得たり交流を行う障害理解教育の実施が重要である。

先行研究では，「知的障害」や「発達障害」の障害理解教育は，在籍児童についての説明や交流及び共同学習の際に行われていることが示されている。しかし「障害」から想起する障害種について，本調査では目で見て分か

る「身体に関すること」「視覚に関すること」「聴覚に関すること」の回答が多かった。「視覚に関すること」「聴覚に関すること」など実際に関わったり見たりした経験の方が，生徒のイメージに繋がっていることが考えられる。また，「かわいそう」「大変」「怖い」というイメージがあることや，「気軽に接することができる」と思う生徒が少ないことの背景にあると考えられる障害のある人との接点の乏しさからも，障害理解教育の重要性が示唆される。感覚機能を含む身体面や認知面の特徴は個人ごとに異なり，そのような多様性自体が人間の本質であることを知るとともに，さまざまな人と関わることができる，体験的な学びの機会の提供が重要であると言える。

生徒の３割程度の生徒は，「障害」についての興味関心が薄いことが明らかになったことから，通常学級において，障害理解教育は，生徒が興味関心をもつことができ，実際に関われるような体験的なものを実施していくことが重要である。一方，７割以上の生徒は，障害について関わったり勉強したりしてみたいという意識が強いことも明らかになった。障害理解教育の実施が児童生徒の印象に残るものになっているかどうかを検証することが今後の課題である。また，障害理解教育で実施されていない障害種であっても，生活の中で見たり関わったりすることで，生徒の中で印象深いイメージになると考えられる。小学校から中学校にかけて，障害理解についてどのような変化があるのかを明らかにしていくことも求められる。共生社会の目指していくために，知識の習得にとどまらず，特別支援学級や特別支援学校などとの連携などをより深めていき，通常の学校における障害理解教育をさらに推し進めていく必要がある。

文　献

1）樋口功季・林田真志・河原麻子・新海晃：公立小学校における「障害に関する授業」の実施状況と課題 ― 担当教員に対する質問紙調査を通して ―．広島大学大学院人間社会科学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，19，1－12，2021.

2）今枝史雄・楠 敬太・金森裕治：通常の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究（第Ⅰ報）―実施状況及び教員の意識に関する調査を通して―．大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育　科学，61（2），63-76，2013.

3）今枝史雄・楠 敬太・金森裕治：通常の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究（第Ⅱ報）―障害種別に見る実施状況の分析を通して―．大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学，62（1），75-85，2013

4）今枝史雄・金森祐治：私立小中学校における障害理解教育の実態と教員の意識に関する研究，LD研究，25（1），92-10，2016.

5）岡野由美子：通常の学級における、障害理解教育に関する授業実践―発達障害のある児童生徒理解を図る授業実践事例を通して．人間教育，2（6），145-153，2019.

6）小野智弘・児玉かおり・日野文貴：特別支援学級の生徒との交流及び共同学習に対する中学生の意識：定期的な交流及び共同学習を通して．宮崎大学教育文化学部付属教育共同開発センター研究紀要，23，13-25，2015.